

婦人参政権

わたし達は科学の発達と進歩の時代を自慢する。では、わたし達が未だに迷信崇拜をしているのは奇妙ではないだろうか。ただわたし達の迷信は異なった形と内容を持っているだけである。しかし、人間の精神を支配する力において、迷信はやはり昔と同じ位に不吉なのです。

現代の迷信とは普通選挙権です。まだその目標を達していない人びとは、それを得るのに血なまぐさい革命を行ない、その主権を楽しんでいる人々は重い犠牲をこの全能の神の祭壇にそなえる。その神に異議を唱える異教徒に災いあれ！

男性以上に女性には迷信崇拜家です。偶像は変わるかも知れないけれど、女性にはひざまずき、手を上げ、彼女の神が人間の足をもっているという事実になく気がつかないのです。こうして、女性は古代からすべての神々の最もすぐれた支持者でした。また、こうして女性は、自らの自由、生き血、その命を神々だけがきびしく取りたてることができる代償として、支払わなければならないのです。「女性の許に行く時は、むちを持ってゆきなさい」というニーチェの有名な格言は、下品だと考えられています。ニーチェはこの文章の中で、神々に対する女性の態度を表現したのです。

宗教、特にキリスト教は、女性に下等なもの、奴隷の生活を宣告してきた。それは女性の特質を妨げ魂を束縛してきたのです。しかし、キリスト教は女性以上にすぐれた、より信心深い支持者は持ち

得ませんでした。実のところ、もし女性から受ける支持がなければ、宗教は長い間庶民生活の要因にはならなかったでしょう。最も熱心なキリスト教徒たち、世界中で最も疲れを知らぬ伝道師たちは、女性であり、彼女の精神を鎮でつなぎ、彼女の身体を奴隷にした神々の祭壇に常に自己をいけにえとしてささげたのです。貪欲な怪物、戦争は、女性から彼女にとって大切で貴重なもののすべてを盗んだ。それは、彼女の兄弟、恋人、息子を取りあげてしまい、そのお返しに孤独と絶望の生活を与えるのです。しかも、戦争の最も偉大な支持者、崇拜者は女性です。子供たちに征服と権力への愛を教えこみ、子供たちの耳に戦争の栄光をささやき、そしてトランペットと銃の音曲で赤ん坊をゆすつて眠らせるのは、まったく女性なのです。また、戦場から戻った戦勝者に栄冠を与えるのも女性なのです。そうです。あの貪欲な怪物、戦争に最も高価な代償を払うのは、他ならぬ女性なのです。

そして家庭というものがある。それは何という恐ろしい迷信でしょう。それこそ女性の生命力の有様を表わしている。その金色に輝く横木の入った現代の牢屋。その輝く外観は女性の目をくらませ、妻、母、主婦として払わなければならない代償を見えなくしている。しかも女性は、家庭に、自己を束縛する力に執拗にしがみついているのです。女性は教会や国や家庭に払う途方もない代償を悟っているから自分たちを自由にする参政権を要求するといえましょう。これは僅かながら真実かもしれない。しかし大多数の参政権論者は、かような冒瀆は全く受け入れない。反対に、婦人参政権こそ、彼女をより良きキリスト教徒、家庭婦人、国家の忠実な信頼できる市民にするのだと常に主張します。それ故参政権は、女性が古昔から仕えてきた神々の全能を強化する手段でしかないのです。

してみると、女性が、この新しい偶像である婦人参政権の前に同じように敬虔であり、同じように熱心であり、同じようにひれふしても、何等不思議ではありません。昔と同じように、女性は顔に笑

みをたたえながら迫害、投獄、拷問、ありとあらゆる形の罪の宣告に耐えるのです。昔と同じように、知識ある人々ですらこの二十世紀の神—参政権から奇蹟を望むのです。生命、幸福、喜び、自由、独立—これらのすべて、いやもつと多くのものが参政権からわき出してくるはずなのです。女性はその盲目的献身で、知識人たちが五十年前に感じとったことが目に入らない。すなわち、参政権は一つの悪であり、参政権は人々の奴隸化に役立つにすぎない、参政権は人々をいかにたくみに服従させるか、わからないように、人々の眼を閉ざしてしまふものだというのである。

女性たちが平等な参政権を求めるのは、大部分が社会のすべての事柄に同等の権利を持たなくてはならないという主張に基づいています。参政権が権利だとしたら恐らくそれに反対できる人はいないでしょう。しかし悲しいことではないでしょうか！人間の心が無知であるため、重荷の中に権利を見るなどとは！また仲間の人間が他の仲間の人間を、無理に力づくで服従させるような法律をつくるというのは、最も残酷な重荷ではないでしょうか。しかも、女性はこの「金色のチャンス」をやかしく要求するのです。しかし参政権こそ、多くの不幸をこの世にもたらしてきた。人びとから誠実と自信を奪い、人びとを徹底的に墮落させ、無節操な政治家たちの手中で、完全な餌食になったのです。ああ、哀れに愚かな自由なアメリカ市民よ！餓死の自由、この広い国のハイウェイを放浪して歩く自由、市民は普通選挙をエンジョイし、その権利なるもののおかげで自分の手足をしる鎖をきたえあげているのです。アメリカ市民が受けとる報酬とはいえ、それはボイコットの権利やピケをはる権利、事実、自分の労働の果実を奪われる権利以外のありとあらゆる権利を禁止してしまう厳格な労働法しかありません。しかも、二十世紀の迷信からくるこれらすべての惨めな結果は、女性たちに何も教えなかったのである。しかも、それで女性が政治を浄化するであらうとわたし達は確信しているの

です。

いうまでもなく、女性にその資格がないという月並みな理由から、わたしは婦人参政権に反対しているわけではありません。また、わたしは、肉体的心理的理由、ないし精神的理由から、女性は男性と同等の投票権をもつべきでないと語っているわけでもないのです。だからと言って男性が果せなかったことを女性が成し遂げるだろうというおかしな意見に目をつむることはどうしてもできないのです。たとえ女性が事態をこれ以上悪化させないとしても、女性が事態を改善することはできないということは確かです。だから、浄化できない何かを浄化できると考えるのは、超自然力を、女性は持つて来ると考えることになるでしょう。女性の最大の不幸は、女性が天使か悪魔のいずれかと見なされて来たことである以上、その真の救いはこの世に置かれていることにあるわけです。すなわち、人間と見なされ、従ってすべての人間的な愚かしさや誤りに落ち入りやすいものと考えられることにあるわけです。女性が政治の場に入るならば、すでに政治の持ち前となっている毒力が減少すると考えるべきでしょうか。どんなに熱心な婦人参政権論者でも、そんなばかげた考えは支持できないでしょう。

事実、普通選挙の最も進歩的研究者には、現在の政治力のシステムはすべて不完全で、生活のさし迫った諸問題に対処するのは、全く向いていないということがわかっています。こうした見方は、婦人参政権の熱心な信奉者、ヘレン・L・サムナー博士が発表した陳述でも支持されているのです。平等な参政権についての立派な著述で、彼女は述べている。「コロラド州で、平等参政権は現存するシステムの本質的な腐敗と下劣な性格を最も明白な形で示してくれる」と。むろん、サムナー博士は特殊な投票システムを考えているが、同じことは代議制度の全機構についても同様に当てはまるのです。こうした根拠から、一つの政治要素としての女性が、いかにして女性自らの利益や男性のそれに貢献す

るかということを理解するのは困難です。

婦人参政権の帰依者たちよ、婦人参政権のある国々や州を見てごらん下さい。オーストラリア、ニュージーランド、フィンランド、スカンジナビア諸国、アメリカの四州、アイダホ、コロラド、ワイオミング、ユタ、などで女性が何を成就したか見てごらん下さい。距離が魔力を貸してくれる――またはポーランドの決まり文句をかりれば――「我々のいない所はうまくいつている（他目にはよく見える）」かようにして、人は、それらの国々や州は自分たちの国や州とは違うとか、そうした国や州では、わたし達より大きな自由や社会的、経済的平等があるとか、立派な人間生活の認識があるとか、人類にとつて必然的な極めて重要なあらゆる諸問題を伴った大きな社会闘争を、わたし達より深く理解していると考えるのです。

オーストラリアとニュージーランドの女性は、投票権を持つてい法律をつくることにも手を貸している。こういった国では、女性の婦人参政権論者がみごとに英雄的闘争を行なつていイギリスよりも、労働条件が良いのでしょうか。そこには、イギリスより大きな母性愛やより幸福でより自由な子供たちが存在するのでしょうか。そこでは女性はもはや単なる性的日用品必需品ではないと考えられているのでしょうか。女性は、男女にとつてのビュリタニズムの二重の道德律から自分自身を解放したのでしょうか。普通の使い古しの女性政治家以外にこれらの質問に、その通りと敢えて答える者がいないのは明らかです。もしそうだとすれば、オーストラリアとニュージーランドを指して平等参政権達成のメッカとするのは馬鹿馬鹿しいことと思われまふ。これに反して、オーストラリアの真の政治情勢を知るものにとつて、政治が裁定委員会の承認なく、ストライキを反乱罪同様の犯罪とする最も峻厳な労働法の制定により、労働を抑圧してしまつたことはよく知られています。私は婦人参政

権がこうした国事の原因になつていと言つても少しもない。しかし、私が言いたいのは、オーストラリアの治績が婦人のすばらしい仕事の功績だとする理由は何もないということだ。

フィンランドでは女性に平等参政権を与えている。いや、代議士になる権利すら与えられている。けどそれでロシアの女性たちにくらべ、一層大きな英雄的行為や熾烈な熱意を發展させるのに役立つたでしょうか。ロシアのようにフィンランドも残忍な皇帝（ツァー）の恐怖のむちの下で、ひどい目にあつていのです。フィンランド人のペロウスカアヤ、スピリドノヴァ、フィンガー、プレシユーウスカアヤはどこにいていのでしょうか。運動のため喜んでシベリアへ行く、数多くのフィンランドの少女たちがどこにいていのでしょうか。フィンランドは悲しいことに英雄的解放者を必要としていのです。なぜ投票用紙はこうした解放者を創ることができないのか。フィンランドの民衆のための復讐者は女性ではなく男性でした。そしてこの復讐者は投票用紙よりもつと有効な武器を用いたのです。

女性が投票してアメリカの州では、絶えず驚異の例として指摘されていのだが、他の州の女性達がついていない、又精力的な努力を傾けても手にすることのできないその投票用紙によつて、何が成就されたのでしょうか。なるほど、婦人参政権のある州では、女性は男性と同じく所有権を保証されている。しかし、財産のない婦人大衆、その日暮らしの多くの賃金労働者にとつて、そのような権利が何の役に立つのでしょうか。平等参政権は女性の状態に影響せず、また影響を与えるのが不可能なのは、サムナー博士でさえ認めていいます。そして、サムナー博士が、この事を知りうる地位にあることも確かです。熱心な婦人参政権者として、またニュージーランド州大学平等参政権同盟から、婦人参政権に好都合な資料を集めるため、コロラドへ派遣されたのだから、サムナー博士はそれに不利になるようなことは言えない筈です。その報告によれば、「平等参政権がもたらした女性の経済的条件への影響

は、ごく微々たるもので、女性とは同一労働について同一賃金は支払われていない。又一八七六年以来コロラドの女性には学校選挙権を得ているが婦人教師の賃金はカルフォルニア州より低い」他方、ミス・サムナーは次の事実の説明をしていない。すなわち、三十四年間女性には学校選挙権を持ち、また一八九四年以来平等選挙権を持っていたけれども、二、三ヶ月前のデンバーにおける国勢調査で、一万五千人の身障児童のいる事実が暴露されている。しかも、教育局には女性が多くいるにもかゝらず、またコロラドの女性は「最も厳しい児童と動物の保護法を通過させ、扶助を受けている身障児や問題児の州立施設に大きい関心を示して来た」にもかゝらず、この市で一万五千人もの身障児がいるなら、それはこちらの女性の世話と関心に対する何と恐ろしい告発でしょうか。児童という最も重要な社会問題で完全に失敗したというのは、婦人参政権の栄光はどうなるでしょうか。そして女性が政治の分野にもたらすはずであった最高の正義はどこにあるでしょうか。一九〇三年鉱山所有者が西部坑夫同盟にゲリラ戦をしかけた時、ベル將軍は恐怖統治を確立して、人々を夜半のベッドから引きずり出し、国境線の彼方に彼らを誘拐して、居留地に追いこみ「棍棒が憲法である」と宣言した時正義感はどこへ行ってしまったのでしょうか。婦人政治家はその時どこへ行つたのでしょうか。またなぜ彼女たちはその投票権を行使しなかつたのだろうか。いや、そうしたのである。彼女たちは、非常に公正で進歩的な人物、ウェート知事を打ち負かすのに手をかけたのである。ウェート知事は、鉱山主たちの道具であるピーボディ知事に地位をあげなければならなかつたのです。ピーボディは労働者の敵で、コロラドのツァーである。男子参政権でもこれ以上の悪いことをしなかつただろう。確かにその通りです。では、婦人参政権が女性と社会にもたらす利益は何だろうか。たびたびくり返される、女性には政治を浄化するという主張は作り話にすぎないのです。さようなことはアイダホ、ワイオミング、

ユタの政治条件を知っている人々からは出て来ない筈です。

女性には本質的に潔癖家で、もともと心が狭くて冷たく、自分がこうでなければならぬと思うと、他人にもそうさせようと努めます。だから、アイダホでは街頭の同性から選挙権を取り上げたし、すべての「猥せつな性格」の女性を投票不適と宣言したのである。もちろん「猥せつ」は結婚における売春だとは思っていないのである。不法な売春と賭博が禁止されるのももちろんである。この点、法律は絶体にも女性的でなければならぬ。それはいつでも禁止するので法律の素晴しさはそこにある。それ以上ではなく、法律の性向そのものが地獄の門を開けるのです。あの法律による禁止令以来、売春と賭博は以前にもまして盛業になった。

コロラドでは、女性のピューリタニズムが思いきつた形で現れた。「女性が投票権をもつてから、名うての不潔な生活をしている男性や酒場に関係ある男性は、政治から落されてしまったのである」コムストック君だつてこれ以上のことはできなかったでしょう。ピューリタンの初期の指導者たちでも、これ以上のことはできなかったでしょう。幾人の女性がこの背のびして得たものの重要さを理解しているだろうか。女性たちは、これこそ女性の向上のかわりに人々のプライベートルな事柄に入りこんで詮索する政治スパイになつたのだということがわかつているでしょうか。なぜなら、動機の良きよりむしろ、コロラドの一女性が言つた通り「女性は自分たちが入つたことのない家々へ入りこんで、政治的にしろ何にしろ探しだせるものはすべて探しだすのが好きなのである」(平等参政権、ヘレン・サムナー博士の証言)その通りです。それは人間の魂の隅々にまで及ぶのである。なぜなら、スキャンダルほど女性の渴望を満たしてくれるものはないからです。また女性が政治家になつた時程この好機を享樂させて呉れるものは他にないのです。

「名うての不潔な生活、そして酒場に関係する男たち」全く、婦人の票集め人にとってこれほど恰好の非難材料はないでしょう。かりに、これらのおせっかいな人びとは、一体誰の生活がその卓越した清潔な環境と政治に釣合うほど清潔なのか決定することができるとしても、酒場の経営者が同じカテゴリーに属しているということはどうするのでしょうか。もしそれがアメリカの偽善と頑迷さでないとするれば、富裕階級の男女間に泥酔が広がってゆくのを法律で制裁するという明白な禁酒法の原則は、貧しい人に残された唯一の場所へも、絶えず監視の目を向けることになるでしょう。他に理由がないとして、女性が政治権力をもつところはどこでも、女性の狭い潔癖な生活態度のため自由にとって一層危険なものとなっています。男性はずっと以前、今日なお女性を引きづりこむ迷信を克服してしまつた。経済競争の場で、男性は効率、判断力、能力をいつも働かせます。だからピュリタンの判定規準で他人の行状を測る時間もなければ測る気もないのです。またその政治活動においても、無目的にあちこち歩きまわることはいらない。男性は、政治の製粉所にとって、材料になるのは量であつて質ではないということ、そしてまた自分がセンチメンタルな改革者や頭の古い化石人間でない限り、政治は泥沼以外の何ものでもないのをよく知っています。

政治の過程を熟知している女性は、野獣の性質を知っているのと同じですが、自分のうぬぼれとエゴイズムから、野獣は可愛がりさえすれば、大人なしい小羊みたいになるのだと信じこんでいるのです。女性は自分の票を売らないのだから、女性政治家も買収されないノでも女性の身体が物質的な報酬をお返しとして買うことができるのでしたら、彼女の票がなぜ買えないのでしょうか。コロラド州やその他で、それが行われているということは、婦人参政権賛成論者によつても否定できない事実です。わたしの意見は人事についての女性の狭量な見方が、男性政治家より優れない理由だと主張して

ているのではない。他にもあるのです。女性の生涯にわたる経済的寄生状態が平等の意味をばやけさせてしまつたのです。女性は男性と同じ権利を要求するけれど、「女性は嫌いな場所ではテントも張らない」のをわたし達は知っている。(ヘレン・サムナー博士より)理想のためなら悪魔にだって立ち向うロシアの女性にくらべ、ここアメリカの女性の平等はなんとまた無意味なことでしょう。

女性が男性と同じ権利を求める。しかも、彼女の出現で男性を打ちのめせないのを憤慨するのは、男性はタバコを吸い、帽子をかぶつたままで、制服を着た召使いのようには席から飛び上がない。かような事柄はつまらない事だが、にもかかわらず、かようなことがアメリカの婦人参政権論者の性質を知る手がかりとなるのです。確かに、イギリスの同性たちはこのような愚かな考えからはるかに成長しています。彼女たちは、自分がその人格と忍耐力に基づいた最大の要求にふさわしいのを示してきたのです。イギリスの婦人参政権論者の英雄的行為と健全さに敬意を表しましょう。彼女たちの精力的な攻撃は、アメリカの無気力な意気地のない女性に感動を与えたのである。けれど結局これらの婦人参政権論者の女性も、真の平等を認識する点ではまだ不十分です。そうでなければ一握りの有産婦人の利益になり、多くの働く女性には何のプラスにもならなかつたひどい法案に、これらの勇ましい闘士達が投入したすさまじく巨大な努力を何と説明したらよいでしょうか。もつとも政治家としての彼女達は御都合主義でした。全てを得ることができないのなら間に合わせの手段を取るに違いないのです。しかし、知的進歩的女性として、もし投票用紙が武器なら、相続権を奪われた人びとが経済的な上層階級の人びとより、一層武器を必要としているのだ、ということを理解すべきでした。また、上層階級の人びとは、経済上の優位のおかげで、すでに多すぎる位の力をもっているのだということも理解すべきでした。

イギリスの婦人参政権論者の輝けるリーダーであるエムリン・パンクハースト夫人は、アメリカでの講演旅行中、政治的優位にある人びとと下位にある人びとの間には、平等はありえないとしています。もしそうだとすれば、ジャックルトン法案の利益を得ている女性たちより、すでに経済的に下位にあるイギリスの働く女性たちは、政治的上位にある人びとと共に働くことができるだろうか。こういう法案は通すべきであろうか。熱心に献身的で殉難も恐れぬアニー・ケーニーと同じ階級の人びとが、経済上の主人をもっているように、女性政治家は背後に政治上のボスを持たざるをえなくなるでしょう。イギリスで普通選挙制が確立される以上、彼女達はそうしなければならぬでしょう。労働者は何をするにせよ、常に金を支払わされるのです。それでもなお、投票のもつ力を信ずる人びとは、彼らの主張するように、票につながる人たちと全く無関係な事柄には、ほとんど正義感を示さないものなのです。アメリカの参政権運動は、ごく最近まで大体客間の出来ごとで、人びとの経済的要求とは全くかけ離れたものでした。かようなわけで、スーザン・B・アンソニーは、もちろん例外的なタイプの女性で、労働には冷淡であるばかりか敵対さえしていたのです。一八六九年ニューヨークで、ストライキ中の印刷工の代りをするよう女性たちにすすめた時、彼女は躊躇せず自分の反対論を表明したのでした。(平等選挙権、ヘレン・サムナー博士より) 彼女の態度が死ぬ前に変わったかどうかは、私は知りません。

むろん、中には働く女性——たとえば婦人商業組合同盟に加入している婦人参政権論者もいます。けれどそれは少数派で、本来その活動は経済方面でした。他の人びとは、労働をまさに神の与え給うたものと考えたのです。でもそれは貧しい人びとのために考えだされたのでなかったら、富める人びとはどうなるでしょう。金持ちの犠牲者の年間所得を上まわる金を、一週間で浪費してしまうこれらの

仕事をしない寄生的な御婦人たちは、八千万の賃金労働者達の為にならないのだとしたら、どうするでしょうか。平等！こんなのがそれだとこれまで聞いたことがあるのでしょうか。

アメリカ程、かような尊大さと俗物根性が生まれている国は少ない。特に、中産階級のアメリカ婦人がそうです。彼女たちは自分を夫と対等と思うだけでなく、特に清潔、善良、道徳などといった面では、夫の上役だと考えているのです。アメリカの婦人参政権論者が、投票権に最高の奇蹟的力を要求しても、驚くにあたらないでしょう。思いあがつたうぬぼれ根性で、自分がほんとうに奴隷化されているのは気づかずにいるのです。男性によつてと同じく自分自身の愚かな意見や伝統によつて奴隷化されているのです。参政権がこの悲しい事実を改めるのは不可能で、それどころかその事実を強めるだけなのです。アメリカ最大の婦人指導者の一人は、女性は一賃金を受ける資格があるばかりかその夫の賃金とも同等の資格が、法律的に与えられねばならないと主張しています。彼女を支持しなければ、彼は投獄され、しかも獄内での賃金は、彼と同等な妻によつて集められるということになるでしょう。この問題で別の輝かしい典型的代表者は、婦人票が世界中の最もすぐれた人びとの集約的努力によつても、失敗に終わった社会悪を一掃してしまうと、女性のために主張しているのではないのでしょうか。いわゆる造物主が、すでにわたし達に事物のすばらしい組織大系を与えているのは残念至極です。もしそうでなかったら婦人参政権で、女性は確しかに男性を完全に打ち負かすことができただしょう。

迷信を解剖するほど恐ろしいものはありません。もしかような異端的言説が火あぶりの刑を免がれたとしても、世間一般の考え方にあえて異論を唱える者は、有罪だとする狭い量見の人びとから免がれることはできないでしょう。だとすればわたしは女性の敵になるのでしょうか。しかし、だからと言

つてこの問題に毅然と対決するのを、わたしは思い止まることはできない。最初に述べたのをくり返します。女性が政治を更に悪くすることはないにしても女性の力でそれが改善されることもないでしょう。そうわたしは信じています。だとすれば、女性が男性の誤りを改善できないにしても、なぜ男性に誤りを犯させるのでしょうか。

歴史は虚偽の寄せ集めかも知れない。にもかかわらず、歴史は少しの真実を含み、これらの真実が未来に対する唯一の導きになるのです。男性の政治活動史は、その政治活動が、直接的でこの上なく金がかかり、しかも息の長い方法によらなければ、達成できなかったのを示しています。実際、男性が獲得した領域の一步一步は、絶えざる戦いと自己主張の休まない闘争によるもので、参政権によって得たものではありません。ですから女性が解放への途上で、投票用紙に助けられたとか、これからも助けられるだろうと推測する理由は何もないのです。

すべての国々の中で最も暗い国、完全な専制政治のロシアでは、女性は投票用紙を通してではなく、存在しようという意志、行動しようという意志によって、男性と同等になったのです。女性が自力ですべての学問と職業の道を征服しただけでなく、男性の評価と尊敬と仲間意識を勝ち取ったのです。そうです。そればかりか全世界の称賛と尊敬までも得たのである。また、参政権によってではなく、自由への闘争における女性のすばらしい英雄的行為、不屈の精神、能力、意志、忍耐などによって得たのである。かような勝利を主張できる参政権のある国や州の女性たちはどこにいます。アメリカにおける女性の業績を考える時、女性を解放する道中では、参政権よりもっと深い、もっと有力な何かが女性解放を支援したことが判ります。

スネカ・フォールズ・コンベンションにおいて一握りの女性が、男性と同等の教育を受ける権利、

さまざまな職業や仕事に就く権利を要求してから、ちょうど六十二年になる。何と素晴らしい女性の業績、何と素晴らしい勝利であったことでしょう！無知な人以外、誰があえて女性を単なる家庭の仕事に追いまわされているものと言うのだろうか。誰が、あれこれの職業は女性に開かれていないと、あえてほめかすだろうか。六十年以上の間、女性は自力で新しい環境や新しい生活をつくりあげてきたのだ。女性は、人間の思想や活動のすべての分野で世界的勢力となってきた。これらはすべて、参政権、法律をつくる権利、判事や看守や死刑執行人となる「特権」によってではないのです。そうです。わたしは女性の敵だと考えられるかも知れない。しかしもしそれで女性の光明をみる機会が支援できるなら、わたしは不平を言わない。

女性の不幸は、男性の仕事をする能力がないということではなく、男性と歩調を合わせていくのが、女性には肉体的に不可能だとしてきた何世紀にもわたる一つの伝統のため、男性に打ち勝とうと女性の生命力を浪費してきたことなのです。それでも、中には成功した例があるのをわたしは知っています。しかし、その犠牲はどんなに大きく恐ろしかったことでしょう。重要なのは、女性がしているその種の仕事ではなく、むしろ彼女の労働の質なのです。女性は参政権や投票用紙に新しい性質を与えることはできず、また女性自身の質を高めるものから何も受けとることはできません。女性の自由と独立を進めるのは、女性自身から生まれてこなければならぬのです。その第一は性の必需品としてではなく、一個の人格だと主張することです。第二は、誰にむかって、自分の肉体についての権利を拒むことによって、また、自分がほしいと思う時以外は子供を生むのを拒絶することによって、また神、国家、社会、夫、家族などの召使いになるのを拒絶することによって、また自分の生活を前より簡素ではあるが、より深くより豊かにすることによってできるのです。つまり、それは、複雑な社

会における生命の意義と内容を学ぼうとすることによって、また世論や世間の非難から解放されることによつてできるのです。投票用紙ではなく、このことだけが女性を解放し、女性をこれまで世に知られなかった一個の力とし、また真の愛、平和、調和への力とするでしょう。さらに、それは命令を与える聖なる火の力となり、自由な男女の創造者となるでしょう。

愛国心

—自由への脅威—

愛国心とは何であろうか。愛国心とは、出生地への愛。すなわち子供時代の思い出と希望、樂園への愛だろうか。それは、子供らしい純真さで流れる雲を見守ったり、どうしてあんなに速く自分たちも走れないのだろうかといふかつたりした場所なのであるか。何十億というキラキラ輝いている星の一つ一つがすなわち一つ一つの目で、それが小さな魂の奥底を刺し貫かないよう恐怖におののきながらよく数えたりした場所であるのだろうか。それはまた、鳥のさえずる楽の音に耳を傾けたり、遠くの土地へ飛んでゆく羽を持ちたいなあと願ったりした場所であるのだろうか。または、母の膝の上で勇ましい行為や征服のすばらしい物語で有頂天になった場所であるのだろうか。つまり、愛国心とは幸福な楽しい遊び盛りの子供時代のなつかしい大切な数々の思い出をあらわしている場所への愛であるのだろうか。もしそういうのが愛国心だとしたら、今日のアメリカ人で愛国的だといわれる人は、殆んどいないだろう。なぜなら、遊びの場所は、工場、製粉所、鉱山になつてしまつたし、一方では鳥のさえずる楽の音の代りに、機械の耳をつんざく音響に代つてしまつたからです。また勇敢な行為の物語も最早や聞くことはできない。なぜなら、今日の母親がしてくれるお話は、悲しみ、涙、嘆きのそれではないからです。

では愛国心とは何でしょうか。ジョンソン博士は言つた。「閣下、愛国心とはヤクザの最後の逃げ